

経済学者のための『モモ』入門

ヴェルナー・オンケン著
宮坂英一訳

(本稿は、雑誌「Fragen der Freiheit (自由の問題)」第一八三号、一九八六年)に掲載された Werner Onken 氏の論文「"MOMO für Ökonomen- Ein Reiseführer in die Welt von morgen" (経済学者のためのモモー—明日の世界への旅行案内書—)を訳出したものである。オンケン氏はエンデから贈られた『モモ』を一読し、エンデがゲゼルやシュタイナーの貨幣理論に関する知識をもっており、それがこの本の中に織り込まれていることを直感した。この論文の執筆にあたって、オンケン氏はエンデ宛てに「貨幣制度改革が『モモ』の中で表現されている印象を受けた」という書簡を送った。それに対し、エンデは「それこそがこの本のテーマです。…… 老化する貨幣が私の本『モモ』の背景にあることに気づいたのは、あなたがはじめてです。シュタイナーとゲゼルの考えをこの数年間、集中的に学びました。そして、貨幣の問題が解決されなければ、私たちの文化に関するすべての問題は解決されないことに気づきました」と答えている。なお、この論文に引用されている『モモ』の訳文については、原則として岩波書店版の邦訳(大島かおり訳)を採用した。ただし、邦訳が意訳されていて、オンケン氏の引用の意図にそぐわない場合は、若干の修正を行った。)

古くから、旅は人を成長させるものだ、といわれている。このことは、見知らぬ国への旅だけでなく、比喩的に解釈して、馴染みのない知的領域への旅についてもいえる。

このような旅は、いまなお内在的な問題に取り組んでいる経済学という国に住む者にとって、とくに価値のあるものであり、何の偏見も持たずに、その専門分野の外側の世界を見ることは重要なことといえよう。

経済学者のための旅の目的地としては、とくに文学者の国がお勧めである。文学者は、鋭敏な感受性を備えており、私たちの時間をめぐる問題についても、いつまでも知覚し続ける能力を有し、彼らのファンタジーははる彼方の健全な未来にまで達することができる。経済学者が文学者から受ける精神的な刺激がどんなに重要なものであるかは、ロルフ・エンガート、ハンス・クリストフ・ビンスヴァンガー、エヴァ・ヘツセがそれぞれ提示したシェークスピアの『ベニスの商人』(1)、ゲーテの『ファウスト』(2)、パウンドの『カントス

』(3)についての解釈が明らかにしている。こうしたすばらしい経験が、さらなる旅行計画を生み出すことになる。文学者の国への旅のつぎの目的地は、現代の文学者、ミヒヤエル・エンデのファンタジー小説『モモ』である。この〈時間どろぼうと、ぬすまれた時間を人間にとりかえしてくれた女の子のふしぎな物語〉(4)はドイツ児童文学賞を受賞し、数年前に絶大な人気を集めたものの、当時、経済学者のあいだでは、ほとんど注目されることはなかった。

私たちは、旅行に出発する前に、たいていは旅行案内書を手にして、その国や人々について知識を深めたり、外国語を習ったり、重要な名所・旧跡についての情報を集めるものである。以下の論者は、このような意味で、ミヒヤエル・エンデの『モモ』のための旅行案内書として理解していただきたい、

〈きょうの国〉のもっとも重要な名所は、〈きのうの国〉の遺跡、円形劇場の廃墟である。ファンタジーに満ちていると同時に、現実の世界にきわめて近いこの物語の主人公は、モモという名のかわいい浮浪児の女の子で、わずかばかりの材料で小屋を作り、この円形劇場に住みついていた。

その昔、円形劇場は、壮麗な寺院や賑やかな市場と並び、もっとも美しい広場の一つであり、そこでは、人々が集まり、芝居を見物したり、演説をぶったり、話に耳をかたむけたりしていた。いまとなつては、ほとんど忘れられた存在であり、ときどき何人かの旅行者がやってきては、廃墟を写真におさめていくだけであった。しかし、モモは近くの町の子どもたちの注目の的になっていた。やがて、この女の子はたくさんの子どもたちと数人の大人たちと友だちになり、この廃境は彼らのお気に入りの溜まり場となった。

しかし、ある日、町全体とその周辺地域を包むように暗やみが広がっていった。いつのまにか、町は権力を握ったお金の外交員、〈灰色の男たち〉によって征服されてしまった。人々は完全にお金の世界の虜になってしまい、何も気がつかないうちに、自分たちの時間について深く考えることもなく、人々のお金が奪われていった。人間の時間は、灰色の男たちのお金に変わっていった。

灰色の男たちは、吸血鬼のように、理髪師〈フージー氏〉に代表される企業家精神を利用していった。外交員 XYQ/384/b は巧みなトリックを使い、フージー氏に「……よけいなことはすっかりやめちまうんですよ」(岩波書店版『モモ』八八頁)といて、仕事をせせとやって、時間を節約するように説得する。そして、ありもしない期待を抱かせ、毎日節約した時間を灰色の男たちが設立した〈時間貯蓄銀行〉に持って行き、口座を開設して、預け入れるよう、フージー氏をそそのかす。さらに外交員は、預けた時間を引き出さなければ、わずか十年後には利子で二倍にもふくれ上がると説明する。そして、一日二時間節約して、銀行に預ければ、自分の生涯の十倍以上の時間を手にできると、フージー氏が疑問を抱く余裕も与えずに、たたみこんでいく。

フージー氏は、外交員の"気前のいい"話にすっかり心を奪われてしまった。彼は時間貯蓄銀行の仕組みが完全に理解できたわけではなかったが、こうした収益への期待から、当然ながらも時間貯蓄銀行の顧客になって、口座を開設しようと考えた。そして、外交員 XYQ/384/b に「どんな仕組みになっているんですか?」と説明を求めた。外交員は、信頼感を失ってはならないという眼差しで、「わたくしどもにおまかせください。あなたの儉約した時間は、一秒のまちがいもなく、ぜんぶわたくしどもの銀行に入ります。あなたの手もとには、すこしものこりません。始めてみれば、すぐおわかりになりますよ」と応えた。フージー氏は、最後におずおずしながら、外交員から何とか説明を求めようとして、「契約書はないんですか?」と尋ねた。しかし、外交員は肩をすくめ、「なんでそんなものがあるんです?」といて、冷やかな笑いを浮かべて立ち去った(八九、九〇頁)。

フージー氏は、外交員の話はまだ完全に信じることができなかったが、莫大な時間の財産、それも時とともに増加する財産にすっかり目がくらんで、自分の生活を合理化し、時間を儉約することにすっかり夢中になってしまった。彼はもうお客とお喋りすることもせず、時間の儉約に協力してくれる労働者やサラリーマンしか相手にしなくなった。そして、時間の無駄遣いになるという理由で、友だちや親類との接触も避けるようになった(母親は養老院に入居したが、彼は月に一度、ちょっと顔を見せる程度になった)。そして、同じ理由から、歌唱や読書といった趣味を楽しむこともすっかり止めてしまった。ただひたすら、外交員の「寝るまえに十五分もその日のことを考えるのもやめ」(八八頁)、自分の行動をあとからよくよ考えるのもやめるという忠告に従うのだった。

フージー氏と同様に、他の人たちも、例えばモモの友だちの左官屋、ニコラも時間を儉約するようになった。彼は時間節約のストレスで相当に苦しんでいた。ニコラは、灰色の男たちが時間を節約し、ひたすら採算性を追求した工事を進めたため、職人の仕事を破壊していることに気づいていた。彼はこの葛藤をごまかすため、自分の感情をアルコールで麻痺させていた。彼はモモに打ち明けた。「おれはまたちっと飲みすぎたよ。いまじゃこれもしょっちゅうなんだ。そうしないと、あそこでやっていることに、がまんしきれなくなるのさ。まっとうな左官屋の良心に反するような仕事をやってるんだ」(一〇九頁)。同じく居酒屋の主人二ノも、小事業主として経営方針を変えていった。家主が店の家賃を引き上げ、物価も上がる一方だったので、上流階級の金払いのいいお客しか店に入れようとしなくなった。(「うちの店に金のないおいぼれどもをかかえこんでいたら、どこから金をとってくりゃあいいんだ?」)(一一二頁)。

やがて、小規模から大規模にいたるすべての経営者、そして労働者、サラリ

一マンが、銀行の外交員の誘惑に負けてしまった。すべての人たちが「ものけにとりつかれて、盲目になってしまったように」(九二頁)、時間節約の虜になった。彼らは、灰色の貨幣の権力による遠隔操作に自らすすんで従い、自分たちの行動様式が知らないあいだに決められていることにまったく気づかないだけでなく、それは自分たちが決めたことだと思い込むようにマインド・コントロールされていた。日常的な時間泥棒、換言すれば、貨幣利子による人間の経済的な搾取は、時間貯蓄銀行と顧客とのあいだの明確な法的根拠のないまま広く定着し、いつのまにか〈きょうの国〉の自由で民主的な法秩序に取り込まれていた。

次第に、町全体が本当に現代的で先進的な容貌を示すようになっていった。町は〈きょうの国〉ではまだ人間にとって安全な場所であったが、〈きょうの国〉では居心地がよくなり、単調で、騒々しく、慌ただしいビジネス都市に変貌してしまった。世界は――ミヒヤエル・エンデが感じとり、まさしく的確に表現したように――「整然の砂漠」(九五頁)と化してしまった

* * *

足音をしのばせて町に侵入してきた現代資本主義によって、人々は正体不明の巨大な金融機械の小さな歯車に仕立て上げられ、無為な生活を送っているのがあったが、大人たちはその事実を誰も認めようとはしなかった。ラジオ、テレビ、ホラー・ビデオといったものにまだ惑わされていない子どもたちだけは、それを感じとっていた。彼らは誰一人として、そんな余分な時間を持っていなかった。子どもたちは自分たちの成長とともに深く関わってくる町が、いま、灰色の男たちに征服された状態にあり、それはまさしく自然に反するものであることを、子どもたち特有の素朴で純真な心で感じとっていた。

小さなモモは、とくに飛び抜けた感覚を備えていた。町が灰色の男たちに征服される以前は、モモは夕方になると廃境のかたわらに座って、きらめく星空を眺め、静寂に耳を傾けていると、「……ひそやかな、けれどもとても壮大な……音楽が聞こえてくるように思えた」(三〇頁)。だが、征服されてしまったからは、夕方になっても、モモはもう昔のようにこの音楽を聞くことはできなくなってしまった。この挿話は、ミヒヤエル・エンデが、古代の哲学者、ピタゴラスによって提唱され、天文学者のヨハネス・ケプラーによって発展した〈天空の音楽〉理論にも精通していることを示すものである。宇宙のハーモニーは、〈きょうの国〉でははっきり聞きとることはできない。なぜなら、人間に対する貨幣の支配によって、経済および社会の領域において宇宙のハーモニーが破壊されているからである。しかし、モモは劇的な戦いを挑み、灰色の男たち

に勝利する。モモは彼らの支配から人々を解放し、失われたハーモニーを取り戻していく。

まず二人の友だちがモモに同行し、戦いを挑んでいく。この二人の正確はまったく正反対ではあるが、お互いに深い友情で結ばれている。一人はベッポという名の道路清掃夫で、ちょっと年はくっているが、人生経験は豊かで、慎重で現実的な生き方をしている。彼はモモに、社会の解放は電撃的な作戦行動によってなされるべきではなく、一步一步着実に取り組み、達成された成果を積み上げていくように忠告する（「いちどに道路ぜんぶのことを考えてはいかん、……つぎの一步のことだけを考えるんだ」）（四八-四九頁）。モモのもう一人の友だち、ジジは観光ガイドで、思いついたことはすぐに実行してしまう気性の激しい若者である。理想主義的なきらいがあり、なかなか現実を直視しようとしなない。しかし、ジジは、円形劇場を訪れる旅行客に、黄金の富を得るという飽くことのない欲望にとりつかれた<クルシメーア・アウグスティーナ女帝>と<世にも残虐な暴君、マルクセンティウス・コムヌス>に関する物語（五八-六四頁）を聞かせている。この物語は、〈あしたの国〉が行き着く先、すなわち、資本主義と共産主義の彼岸を明確に認識させるものである。

〈きょうの国〉から〈あしたの国〉への旅は、外交員 BLW/553/c がモモを訪れることから始まる。この外交員は、灰色の男たちが創り出した、言葉の真の意味における精神のない唯物主義をモモに感染させ、貨幣の支配に対する彼女の反抗心を打ち砕こうと、モモにお土産として〈完全無欠な人形、ビビガール〉を携えてきた。彼は、モモが文明という人形に夢中になることに一片の疑いも抱かなかった。しかし、モモはこの人形をつうじて、はじめて退屈という感情をもった。外交員はモモからこの感情を追い出そうと、人形の衣裳、革製の手袋、化粧用具、テニスのラケットなどなどを贈った。というものの、この外交員が考える空疎な人生観によれば、「つぎからつぎといろんなものを手に入れば、たいくつなんてしないですむ」（一二二頁）からだ。

モモは、人形を欲しいという気持ちと、そんなものは受け入れられないという感情に揺れて、なかなか決心がつかなかったが、最終的にこの誘いを断り、現代といううわべだけの魅力の虜になることはなかった。「あたしは思うんだけど、この人形じゃ、好きになれないわ」（一二五頁）。

外交員 BLW/553/c は、そんなことは問題じゃないと、モモにいい放った。しかし、それが自らの不安感を隠すだけの強がりではないことは明らかであった。なぜなら、モモの内心から発せられる暖かな光線が、氷のように冷たい外交員の灰色の鎧を突き抜け、一瞬、自分自身を見失わせてしまい、モモに灰色の男たちの秘密を打ち明けることになったからだ。「知られないでいるあいだしか、仕事ができない……むずかしい仕事だ、人間から生きる時間を一時間、

一分、一秒とむしり取るんだからな……われわれがうばって、貯めておくんだ……ああ、きみたち人間ときたら、じぶんたちの時間のなんたるかを知らない!……だが、われわれは、われわれは知っていて、きみたちの時間をとことんまでしゃぶりつくすのだ……それも、もっともっとたくさん要るようになる……もっともっとだ」(一二九頁)。

外交員は、とんでもないことをしでかしてしまったことに気づき、慄然とした。彼はいましゃべった<でたらめ>をすべて忘れるようにモモに哀願し、人形とその小物を抱えて、あわててその場を立ち去った。モモとの最初の直接対決は、灰色の男たちの敗北で終わった。こうして、支配という彼らの厚い氷の一角が溶け始めた。

灰色の男たちは、傷つきやすい存在であった。モモは彼らの秘密を忘れるどころか、心にしっかり刻み込み、二人の友だち、道路清掃夫のベッポと観光ガイドのジジにすべてを語った。若くて気性の激しいジジは、灰色の外交員たちを打ち負かし、「町ぜんたいを救える」(一三二頁)ときがやってきたと考えた。気の早い彼は、人々から熱狂的に迎えられる解放者の姿を自分自身にだぶらせていた。五〇～六〇名の子どもたちによる秘密の会合では、慎重で用心深いベッポの意見は退けられ、時間貯蓄銀行の資本主義的な性格を広く人々にアピールするというジジの提案が採択された。

今後の取り組みについて協議している中で、パオロという少年が、子どもたちは科学者に助けを借りるべきだと提案したが、フランコは「なんかっていうと、おまえはすぐ科学者、科学者って言うんだな！科学者だからって、すぐ信用できるわけじゃないぞ！かりにそういうことにくわしい科学者を見つけたとしてもだよーそいつが時間どろぼうの手先じゃないって、どうしたらわかる？」(一四二頁)と、強硬に反対した。時間泥棒を警察に届けるという少女の提案も拒否された。科学者と同様、国家機関もあてにならないと考えているフランコは、再び、「警察なんて、なにができる！ふつうのどろぼうがあいてじゃないんだぞ！警察がとっくにやつらのことを知ってるんだとすれば、警察は手も足も出せないでいるってことになる。もしこんなひどいことに気もつかないでいるんだとすればどっちみち警察はまるっきり役には立たないってことさ！」(一四二頁)と、強烈に批判した。

灰色の男たちの権力は、彼らの存在が知られていないことが前提となっており、あらゆる人たちに彼らの本質を知らせることが重要となる。ジジは会合の最後に、子どもたちは科学者や警察の助けをあてにするのではなく、自分たちだけで啓蒙活動を行う必要があると、皆に訴えた。さらに、子どもたちの大集会を開き、プラカードや横断幕を掲げて町じゅうを練り歩き、人々に円形劇場で開催される講演会への参加をアピールすることを提案した。ジジは自ら大胆

な夢を語り、「なん千、なん万もの人びとが、ここに押しよせてくるだろう！」(一四三頁)と、演説を締めくくった。

そして、計画はすぐにも実行に移された。しかし、子どもたちの予想は見事なまでに裏切られ、大人たちはただの一人も姿を見せなかった。大人たちは自分自身の問題を考えたり、真実を知って自分たちの生活が乱されるのを望まなかったのだ。すなわち、啓蒙活動は、灰色の男たちを打ち破る方法としては、時期早尚であった。その前にまず、人々の心の内部で、魂に触れるような変革が必要であった。(5)

一方、灰色の男たちも無為に時間を過ごしていたわけではなかった。彼らは町の外れのゴミ堆積場で、外交員 BLW/553/c を裁判にかけていた。当然ながら、密告の罪は、死刑以外の刑罰はあり得ない。外交員 BLW/553/c に対し「いっさいの時間の供与を即刻に停止する」(一五七頁)判決が下された。

裁判の終了後、灰色の男たちは、自分たちの支配を維持するために何をなすべきか議論し、モモを支配下におく必要があるという結論に達した。そして、彼らは大がかりな捜索隊を組織し、モモの追跡に乗り出したが、何の手がかりも得られなかった。一方、三〇分先の未来を予知する能力をもち、モモと自然との強い絆を象徴するカメのカシオペアがモモの救出に乗り出した。カメは危険地帯からモモを連れ出し、町の雑踏を通り抜け、〈さかさま小路〉に入り、さらにすべての時間の起源とされる〈マイスター・ホラ〉が住む〈どこにもない家〉に向かった。

モモ追跡の失敗は、時間貯蓄銀行の指導部に不安と困惑をもたらした。緊急に開かれた会議の中で、指導部の一人は、モモに援助の手がさしのべられ、灰色の男たちの手の届かない〈どこにもない家〉の安全な場所に匿われている可能性を認めた。やがて彼らも、自らの支配を脅かすものは一人の小さな女の子だけではなく、その背後には絶大な力を持ったマイスター・ホラという存在があることを悟った。すなわち、モモの追跡は、富の邪神マモンと神との一騎討ちになった。そして、そのキャスティングボートはモモの手に握られていた。

モモはマイスター・ホラへの道を見つけ出すことができたが、灰色の男たちは何度も試みたものの、ついに発見できないでいた。そこで、彼らはモモの追跡をあきらめ、モモがホラのところから戻ってきたところを捕まえて、道を聞き出し、神と交渉を行うことに決めた。「……彼(マイスター・ホラ)とはきっと、たちどころに話がつけられるだろう。そしてもし、われわれがあその場所をわがものとしさえすれば、それからはもう苦労して一時間、一分、一秒などどこきざみに時間をぬすみとる必要はなくなり、あらゆる人間のいっさいの時間をいっぺんに手に入れることができるのだ！ 人間の時間を手中におさめれば、無限の権力をにぎることになる！ そうなれば……われわれは目的を達せられ

るのだ！」(一八五頁)。

モモが目指したマイスター・ホラの住む〈どこにもない家〉への道のりは、文学者の国へ向かう私たちの旅のクライマックスでもある。〈どこにもない家〉には、ハーモニーにあふれた天空の音楽が響きわたり、言葉で表現できないような美しい彩りに満ちていた。ここには、あらゆる生命の源があった。マイスター・ホラが住む、金色の光線によって織り出された、果てしない広間には、無数の時計が置かれていた。そして、それらの時計はどれも異なる時間を示していた。モモは、一つのなぞなぞを解くことで、その意味を理解した。過去と現在と未来は一つのまとまった存在であり、どれ一つとして切り離すことはできない。あらゆる生命はつねに生と死から成り立っている。生と死の絶えまない転成は、あらゆる生命とあらゆる時間を支配する永遠の法則である。

マイスター・ホラは、モモがこの生命の法則を理解したのを確認すると、〈時間のみなもと〉へ連れて行った。モモはそこで、いままで見たこともない光景に出会った。そこでは星の振り子が往復運動を繰り返し、その下では、蕾が灰色の水面から浮かび上がり、つぎからつぎへと、すばらしい香りを放ちながら、色とりどりの美しい〈時間の花〉を咲かせ、そして今度は花がしおれ、再び灰色の水の中に消えて行った。そして、そのとき、モモは、遠くからかすかに聞こえてくる天空の音楽を耳にした。それは、〈きのうの国〉で夕方、円形劇場の端に腰掛けて、星を眺めていたときに聞いたことのあるものだった。

蕾から花開き、再びしぼんでいく〈時間の花〉は、あらゆる生命の生と死を象徴するものである。それは、心を打つような美しさと詩的な描写にあふれており、残念ながら、この私たちの旅行案内書では表現することができない。人は一人でそれを探し出し、自ら直接、体験しなければならない。そうすることによってのみ、〈時間の花〉が備えるすべての力は、それを目の当たりにした者の魂の奥深くで発現することが可能となる。経済学者が身にまとっている理論という鎧は、外交員 BLW/553/c の氷の鎧と同様、このような熱線を受けつけようとしないが、経済学の国からやって来た旅行者にとって、〈どこにもない家〉で得た印象は、精神の根幹にかかわる経験となり、心の内部の変革をもたらすことも不可能ではない。〈時間の花〉は技術万能主義の迷信を震撼させる力を備えており、人間があらゆる生命に対する限りない影響力を手に入れることも不可能ではない。〈時間の花〉が、マモンと神との戦いに決着をつけるために必要となる、世界の根幹に対する揺るぎない信頼をモモに与えるように、それは私たちの心に強く訴えかけ、私たちを再びすばらしい世界に順応させ、私たちをその世界に〈抱か〉せようとする。

イエスが昇天し、キリスト教徒がその再臨を待ちわびているように、ベッポとジジをはじめとして、多くの子どもたちがモモの帰りを待っていた。しかし

、子どもたちは、すぐに灰色の男たちの手に落ちてしまった。

ジジは、灰色の男たちの影響で、放送番組の物語作家として成功をおさめた。彼は、ラジオやテレビをつうじて、聴視者が自分たちの存在意義に疑問を抱いたりしないように、退屈しのぎの物語を聞かせていた。この仕事で、ジジはかなりのお金を稼いでいた。やがて、金持ちが住む高級住宅地に家を持ち、自らジロラモと名乗るようになった。

ベッポは、モモの捜索願いを出すため、警察へ行った。だが、警察へ届け出したことによって、彼は複雑な官僚機構に巻き込まれ、結局、精神病院に送られてしまった。

そして、子どもたちは――非行化を防止するという名目で――〈子どもの家〉に收容された。ここでは、子どもたちは灰色の制服を着せられ、将来、時間貯蓄家として生活を送る準備のため、気味の悪いパンチ・カードごっこを教え込まされた。また、子どもたちには、MUX/76/yのような、アルファベットと数字の組み合わせが割り当てられた。そして、それらは混ぜ合わされ、カード・ボックスに入れられた。

モモが〈どこにもない家〉から戻り、友人たちにマイスター・ホラとの出会いを知らせようとしたものの、彼らを見つけることはできなかった。彼らは皆、灰色の男たちが作り出した環境にすっかり同化していたり、灰色の男たちに順応してしまっており、誰もモモのことなど気にもとめていなかった。カシオペアという名のカメの形をした自然だけが、モモの味方だった。しかし、モモがジジを見つけ出そうとしていて、生命に対する信頼が揺らぎ始めたとき、カメもまたしばらくのあいだ、モモの前から姿を消してしまった。

モモは友人たちのもとを去り、数ヵ月間、まったくの孤独の中にいたが、ある日、突然、モモの前に灰色の男たちの一人が現れた。その男は、葉巻を吸って「……けむりの輪をひとつプカリと吹きあげました。輪はヘビのようにモモの首にからみつきました」(二八九頁)。そして、モモが金融帝国の手中にあり、もはやそこから逃れるすべはないことを告げた。さらに、モモの友だち全員を捕まえており、モモのことも何でも思うままにできると脅かした。しかし、彼らはモモの命までは奪うつもりはなかった。なぜなら、灰色の男たちは、モモにマイスター・ホラのところへ案内させ、ホラから権力を奪い、全世界の支配を目論んでいるからだ。彼は自信たっぷりにモモにいった。「われわれは、ぜんぶの人間の時間をそっくりまとめてもらいたいんだ。それをホラにわたしてもらわなくてはならん！ ……こんどはわれわれがこの世界を支配する！」(三〇一頁)。

灰色の男は、夜中にモモと再び交渉することを伝え、姿を消した。

* * *

そして、灰色の男たちは約束した時間に現れた。何台もの自動車に分乗して彼らはあらゆる方向からモモのところへやってきた。自動車はモモを取り囲むようにして近づくと、目もくらむようなヘッドライトをモモに当てた。灰色の男たちの姿は、暗やみの中で見ることにはできない。不安と氷のような冷気がモモを襲った。しかし、そのとき、モモは〈どこにもない家〉の美しい色とハーモニーにあふれた響きを思い浮べると、「……たちどころにおそろしきは消え、力がわきおこってきたような気がしました」(二九七頁)。

本当にマイスター・ホラのところへ行ってきたのかという、灰色の男たちの問いかけに、モモは黙ってうなずいた。すると、〈時間の花〉が実際に存在するのか、モモがそれを見たのかどうか、つづげざまに聞いてきた。人間から時間を盗み、それを貨幣の形で〈凍ら〉せ、生と死から時間を奪い取っている灰色の男たちにとって、〈時間の花〉は、自分たちに敵対するあらゆる生命の基本法則の象徴であり、彼らはこれに対しこのうえない恐怖を抱いている。

すると、暗やみからモモに呼びかける声が聞こえた。それは、灰色の男たちをマイスター・ホラのところへ案内すれば、恐ろしい孤独から解放され、友だちも皆、返してやるという内容だった。しかし、モモは拒絶した。「たとえできたって、案内はしないわ」(三〇二頁)。実際のところ、モモ一人では案内することはできなかった。モモをマイスター・ホラのところへ連れて行ったカメのカシオペイアの居場所は、モモ自身にも分からなかったからだ。灰色の男たちは、カシオペイアを探すため、すぐに大捜索隊を送り出した。

しばらくして、三〇分先の未来を予知する能力のあるカシオペイアは、モモのところに戻ってくると――今度は、灰色の男たちの追跡を受けながら――再びモモをマイスター・ホラのところへ連れて行った。灰色の男たちが〈どこにもない家〉の周りを取り囲んでいるあいだに、マイスター・ホラは、時間と時間泥棒、生命、それに時間貯蓄銀行による人間の搾取に関わるさまざまな経済的な問題について、モモに語って聞かせた。そして、貨幣の灰色の支配者たちとの決定的な対決に必要な方策を授けた。

マイスター・ホラとモモのこの二人の会話には、理論を寄せ集めただけでは得られない、経済問題に関する深遠な真理が隠されている。まず、モモはマイスター・ホラに「灰色の男たちは、いったいどうしてあんなに灰色の顔をしているの?」と尋ねる。マスター・ホラは答える。「死んだもので、いのちをつないでいるからだよ。おまえも知っているだろう、彼らは人間の時間をぬすんで生きている。しかしこの時間は、ほんとうの持ち主から切りはなされると、文字どおり死んでしまうのだ。人間というものは、ひとりひとりがそれぞれのじぶ

んの時間を持っている。そしてこの時間は、ほんとうにじぶんのものであるあいだけ、生きた時間でいられるのだよ」「じゃあ灰色の男は、人間じゃないの?」「いや、ちがう。彼らは人間のすがたをしているだけだ」「でもそれじゃ、いったいなんなの?」「ほんとうはいないはずのものだ」(二〇一～二〇二頁)。灰色の男たちは、不正な貨幣システムの受益者にすぎない。その貨幣システムは、本来、人間に備っているものではなく、自然界の外にあって、貨幣を〈凍結〉させる機能をもつものである。

モモはさらに質問を続けた。「彼らはどうしているようになったの?」「人間が、そういうものの発生をゆるす条件をつくり出しているからだ。それに乗じて彼らは生まれてきた。そしてこんどは、人間は彼らに支配させるすきまで与えている。それだけで、彼らはうまうまと支配権をにぎるようになれるのだ」(二〇二頁)。レッセ・フェール、レッセ・アレ! 法秩序が貨幣の権力を認め、それがすでに存在し、警察に妨げられることなく、拡大していくだけで十分である。

「もし時間をぬすむことができなくなったら、どうなるの?」「そうしたら、もとの無に帰って、消滅してしまう」(二〇二頁)。換言するならば、自然に適合した貨幣システムによって、灰色の金利生活者たちが利子をつうじて人間から時間を盗むことができなくなってしまうえば、彼らは、人間存在としてではなく、不正なシステムの受益者として、"安楽死"ーケインズー(6)を受け入れなければならない。

マイスター・ホラは、さらにモモに語り続けた。「人間はひとりひとりがああいいう金の時間の殿堂を持っている、それは人間が心を持っているからだ」(三二〇頁)。灰色の男たちは人間の心から〈時間の花〉を奪い取り、その時間を貨幣の形に変えて、貯蔵庫に冷凍保存しており、時間は完全に死んだ状態でもなければ、完全に生きているわけでもなく、その本来の所有者に戻されることもない。

時間の強奪者たちは、〈時間の花〉を貯蔵庫から取り出しては、〈時間の花〉から花びらをむしりとり、それを丸めて葉巻をつくっていた。すなわち、彼らは、蓄積した貨幣を大きな煙突を備えた工場に投資していたのだ。マイスター・ホラを脅すため、この煙で時間に毒を入れていた(三一九頁)。

しかし、マイスター・ホラは、これ以上、生命が脅かされていくのを黙って見過ごすことはできなかった。彼が行動にでるときがやってきた。「わたしはいままで、人間がじぶんの力でこの悪霊どもの手からのがれるようになるのを待っていた。……しかしまとなっては、もう待てない。なにか手を打たなくてはいけない」(三二二頁)。もう長いあいだ、人々はレッセ・フェールにもとづいて行動し続け、悪霊たちの思うままに任せてきた。確かに人々は、公正取

引委員会によって市場の権力を抑制したり、労働組合の力を借りて中立化することを試みてきたが、いずれも失敗に終わった。市場の自由の擁護者たちは、警察と同様、貨幣の権力のことなどほとんど予想もしていなかった。労働組合の方も、対抗勢力としての立場に満足し、社会経済にもとづいた時間貯蓄銀行の支店を開設するようになり、自ら灰色に変わっていった。

灰色の男たちが、毒を入れて、環境を汚染すると脅していたため、マイスター・ホラは、世界の救出に向けて、乗り出さざるを得なくなった。

モモはマイスター・ホラに尋ねた。「それなら、時間どろぼうが人間から時間をこれ以上ぬすめないようにすることだって、わけもないことでしょう?」「いや、それはできないのだ」と、マイスター・ホラは答える。「わたしのつとめは、人間のひとりひとりに、その人のぶんとして定められた時間をくばることなのだよ。……人間はじぶんの時間をどうするかは、じぶんじしんできめなくてはならない。だから時間をぬすまれないように守ることだって、じぶんでやらなくてははいけない。」(二一頁)。すなわち、神の世界創造プランには、社会を調和させ、宇宙的なハーモニーへ回帰させるために、社会に干渉することは考えられていない。同様に、神に代わって全能の国家が、人間一人ひとりに割り当てられた時間を自由に使う権利に干渉することも許されていない。人間は、自分の時間はく<自分で守ら>ねばならない。それは、換言すれば、神のみわざを社会的および経済的領域において完成させるという、創造者によって課せられた責務である。そして、それは、灰色の、自然に反するシステムとはまったく異なる、宇宙的な秩序原理に適合し、時間泥棒を不可能にする、生命力にあふれた貨幣システムを築き上げることによってなされなければならない。

しかし、それはマイスター・ホラ一人の力では無理なことだ。彼は、何かしなければならぬことは分かっていたが、世界を救うためには、彼と自然にぴったり調和した人間の自主的な助けが必要になる。モモはそうした人間たちを代表して、世界を救済し、理想社会に近づけるため、マイスター・ホラの力になることを申し出た。そのためには、モモは彼の指示にしたがって、時間貯蓄銀行本店の貯蔵庫へ続く道を探し出し、冷凍状態にある貨幣に〈時間の花〉を触れさせなければならない。

わずかに一輪の〈時間の花〉を携え、カメのカシオペアを従えただけで、モモは、貨幣の支配者との戦いに挑み、驚くべき方法で勝利を収めた。モモは、灰色の男たちに気づかれずに、貯蔵庫のところへ行き、しおれかけた〈時間の花〉の最後の花びらで冷凍されている貨幣に触れ、眠っている貨幣に"キスし

て目覚めさせ" (7)、「ぬすまれた時間をぜんぶ解放する」(三二四頁)ことをやってのけた。貨幣が花びらに触れた瞬間にーールドルフ・シュタイナーの「老化する貨幣」やシルビオ・ゲゼルの「減価する銀行紙幣」(8)のようにー生と死の絶えまない転成という永遠の法則への順応が始まった。貨幣の権力は自然に反し、自然を破壊するものでもあるが、神と自然と人間との新たな絆は、最終的に、この貨幣の権力にも勝ることが示された。

貨幣の権力が敗れたのち、“解凍された”時間はその本来の所有者の心の中に戻っていった。貨幣の流通は、環境にやさしい最新の生産施設と同じように、分散化された。灰色の金利生活者は安楽死を迎え、無の世界に帰っていった。一方、それまで灰色の男たちの存在を受け入れ、金利生活者の役割(ケインズのいう“非機能的投資家”)を認めてきた人間は、これまで搾取されてきた人間とともに、自然との再統一を果たした、自由で、社会的な有機体へと変わっていった。

貨幣が自然に順応すると、「自由となった時間のあたたかな春の嵐」(三四八頁)が始まった。宇宙のハーモニーから社会の不協和音を取り去ることができた喜びで、モモはこの春の嵐を「すばらしい音楽にのった心はずむおどり」(三四九頁)のように感じた。嵐はモモをとらえると、遠い〈あしたの国〉へと運び去った。そこでは、人間と神と自然とが完全に調和した生活が営まれ、人間存在の意味を再発見することが可能である。

* * *

人間に対する貨幣の権力と、貨幣を人間の奉仕者に変えた小さな女の子、モモについて書かれたミヒヤエル・エンデのファンタジー小説は、完成された美の文学的な音楽作品といえる。それは、卓越したことばのシンフォニーであり、一つ一つのことばが美しい響きで全体へと築き上げられており、経済学と形而上学の総合芸術にみごとなまでの精神的な統一性を授けている。

このような魅力的な文学作品への旅を終えたあとに、再び厳しい経済学の現実に立ち戻るのは、やさしいことではない。しかし、病におかされた〈きょうの国〉が治癒可能であり、社会的に健全な〈あしたの国〉の例に倣うことができるという、この旅によって得られた確信があるならば、現実への帰還がづらいものとなるとは限らない。

まだわずかな勢力ではあるが、社会の健全化を追求する経済学者のグループに対して、文学者の国から与えられた力強い支援は、私たちにつきのような期待を抱かせる。経済学者の国の精神の耕地は、ファンタジーに満ちたこの童話を読むことによって徐々に耕され、自然の摂理にかなった貨幣という理念が、

〈きょうの国〉においても、いずれ立派な実を結ぶことになるだろう、と。経済学の専門家は、そもそも文学者に経済学的な問題を評価する能力があるのかと、異議をとなえるだろう。しかし、こうした批判は、ミヒャエル・エンデのような文学者には当たらない。私たちは、このような批判に対して、エンデのつぎのことばで応えることができよう。「学者の書いた本に出てくるか、こないかってことに、そんなにちがいがああるかな？ 学者の本に出てくる話だって、ただの作り話かもしれないじゃないか。ほんとうのことは、だれも知らないんだもの、そうだろ？」(五二頁)。

原注

(1) Rolf Engert, Shakespeares < Kaufmann von Venedig > und die Pervertierungen des Lebens, in: Rolf Engert, Silvio Gesell in München 1919. Hann-Münden:Fachverlag für Sozialökonomie, 1986. Seite 113-135.

(2) Hans Chr. Binswanger, Geld und Magie --Deutung und Kritik der modernen Wirtschaft anhand von Goethes< Faust >. Stuttgart: Edition Weitbrecht, 1985, -- Rezension von Dieter Schad in der Zeitschrift für Sozialökonomie 68. Folge(1986). Seite 37-39.

(3) Ezra Pound, Usura Cantos XLV und LI (Hrsg. Eva Hesse). Zurich: Verlag Die Arche, 1985. Rezension von Werner Onken in der Zeitschrift für Sozialökonomie 69(1986), Seite 40-43.

(4) Michael Ende, Momo --Die seltsame Geschichte von den Zeit-- Dieben und von dem Kind, das den Menschen die gestohlene Zeit zurückbrachte. Stuttgart: Thienemanns Verlag, 1973.

(5) Ernst Winkler, Vor einer Mutation unseres Wirtschaftssystems, in: Zeitschrift für Sozialökonomie 62. Folge (1984), S.3-18 und Hans Doerner/Werner Onken, An der Wende von einer mechanistischen zu einer ganzheitlichen Ökonomie, in: Zeitschrift für Sozialökonomie 67. Folge (1985). S.18-30.

(6) ”資本主義の安楽死”は、一人の解雇者も出すことのない、これまでにない、広範囲にわたる社会的大変革となるものである。階級間の争いも生じなければ、人種間の殺戮が行われることもない。

(7) 花に触れることによって世界を救済するというモチーフは、グリム兄弟の童話の一つ「ヨリンデとヨリンゲル」にも見られる。ヨリンデとヨリンゲルが魔女の住む城に近づき、ヨリンデは魔女に魔法をかけられてしまう。すると、ヨリンゲルは〈真ん中に大きな真珠のついた不思議な赤い花〉の夢を見る。ヨリンゲルは一日中、この花を探しまわり、ついにそれを探し出す。ヨリンゲル

は花を持って城に戻り、その花を使って魔女の魔法からヨリンデを救い出す。

(8) vgl. Werner Onken, Vom Tableau Economique zur ökologischen Kreislaufwirtschaft, in: Zeitschrift für Sozialökonomie 63. Folge (1984), S.11-24, bes. S.18ff.